


お花の栽培シリーズ「クロタネソウ」

2008年11月	霜月(しもつき)・雪待月(ゆきまちづき)・霜降月(しもふりづき)・冬半(とうはん)・仲冬(ちゅうとう)・神楽つき(かぐらづき)	●霜対策と越冬対策を行う時期
<p>●朝夕は肌寒いけれど、日中はおだやかな晴天が続きます。さまざまな木々の効用が目をもたらしてくれます。</p> <p>●冬に向けて防寒対策をしっかりと行い、植物の保護を忘れずに!</p>		
庭木の作業	<p>・落葉樹の植えかえが下旬から可能になります。葉がすっかり落ちて、休眠にはいったらはじめましょう。</p> <p>・落葉樹の手入れは、落葉後にとりかかります。常緑樹には手をつけてはいけません。</p>	
草花の作業	<p>・10月下旬から、ユリの球根の植え付けが適期となります。</p> <p>・秋まきした苗や、植えかえしたばかりのものはビニールなどで覆い、風や霜を防ぐ。</p>	

今月の誕生花	サフラン・シクラメン・シンビジウム	
今月の花	<p>ワレモコウ 花言葉 / 愛慕、変化、移りゆく日々</p> <p>ワレモコウは、日本の秋を飾る代表的な草花で、古くから重要な花材とされてきました。最近では、作曲家としての数々のヒット曲を持つすぎもとまさとが、自身の母親を亡くしたとき、友人・ちあき哲也氏(作詞家)からお母様へと渡された詩に曲を付け、自ら歌ったものがヒットして話題をよびましたね。</p> <p>ワレモコウは、『吾木香』と書き、茎や葉に香りがあることから名づけられたものです。また、根茎は漢方で、地榆と称して、薬用に用いられています。</p> <p>また、和歌などに詠まれることも多い花で、奈良時代にすでに花の名が記録されています。小林一茶が「ワレモコウさし出て花のつもりかな」と詠んだように、花らしくない花ですが、それでも、野山を彩るほかの美しい花々に気後れせず、背筋を伸ばして立っています。</p> <p>「しゃんとして干草の中の吾亦紅」という句もあるほどです。</p> <p>もっとも、花びらに見えるのはガクで、本物の花びらは退化しています。ワレモコウは地味ですが、どこか懐かしさを感じさせてくれる花。そんなところから『愛慕』という花言葉が生まれたのでしょうか。</p>	
<p>原産地は日本からユーラシア大陸の温帯、欧州まで。バラ科ワレモコウ属の多年草。草丈は30~120cm。開花時期は8~10月。最盛期は9月。葉の形状は、はじめロゼットにつき、後に茎を伸ばしてまばらに分枝、奇数回の羽状複葉、小葉には粗い鋸葉、根出葉あり、互生。花色は、赤・ピンク。英名バーネット・ブラッドワート(Burnet bloodwort)。別名 地榆(じゆ)、吾亦紅(漢字表記)吾木香(漢字表記)花持ちは1週間程度。</p>		

お花の栽培シリーズ

今月の花

クロタネソウ



葉形が線のように細く、花も細かい糸状の総苞に包まれた特異な形をしています。英名で“霧の中の愛人”と呼ばれるように、幻想的な花です。

花が散った後にできる径2cmくらいの果実も、特徴ある形でユニークです。茎ごと切り取って、ドライフラワーとして広く楽しまれています。この果実が裂けると、中から種が出てきますが、この種の色が黒いことから、クロタネソウと呼ばれます。「ニゲラ」というのもラテン語で「黒い」を意味することばです。

移植を嫌うので、直まきして育てます。加湿にならないように、乾燥気味に管理します。

どんな土質でもよく、日当たりと水はけのよい場所を選んで種をまきます。

光が当たると発芽しませんから、かならず土をかぶせます。発芽したら株間10~15cmとなるように、間引きします。



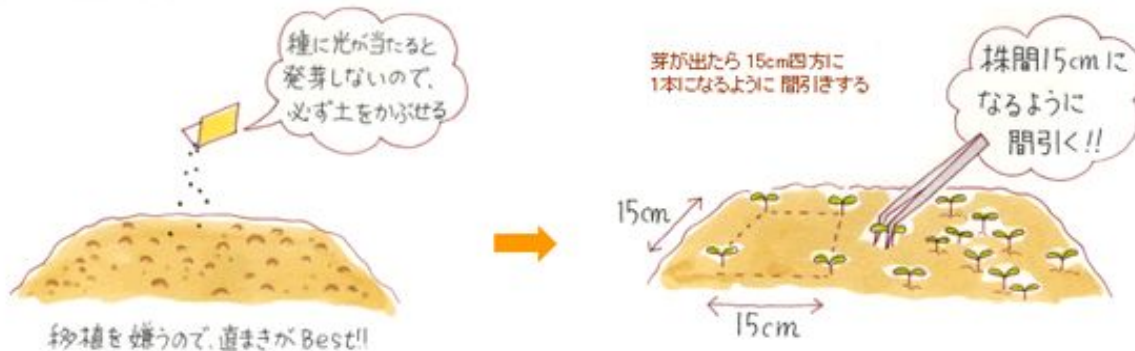
クロタネソウは、日本に渡来したのが江戸時代の終わり頃というほど、日本でも大変古くから栽培されてきている植物です。

このクロタネソウの近似種種類には、種を調味料として利用されている種類「Nigella arvensis (ニゲラ・サティバ)」もあります。

● 植えつけのやり方

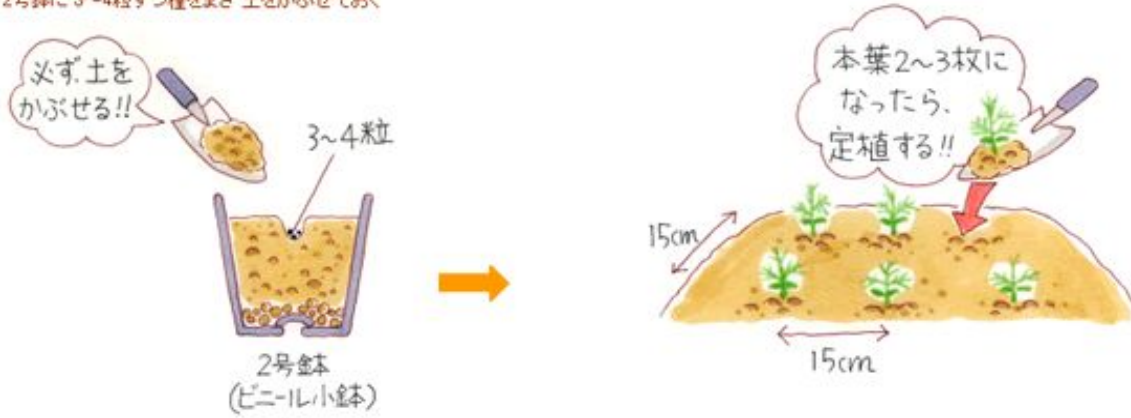
◎ 直まき

移植を嫌うので、花壇やプランターに直まきするとよい。種まきは9月上旬~10月上旬。用土は、水おけがよければ土質はこだわらない。元肥に1平方メートルあたり有機配合肥料2握りを混ぜておく。発芽には光を嫌うので、土をかぶせる



◎育苗してから植えつける

苗を育ててから 植えつけをする場合は、
2号鉢に 3~4粒ずつ種をまき 土をかぶせておく



●年間スケジュール

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
状況	花期 											
置き場所	屋内の日当たりのよい場所 							屋外の日当たりのよい場所 				
水やり	表土が乾いたら与える (3~4日に1回) 				表土が乾いたら与える (1~2日に1回) 			表土が乾いたら与える (3~4日に1回) 				
肥料										元肥 		
病気・害虫												
作業									種まき 		植えつけ 	